しゃきっと vol.2
平成十五年一月一日発行
発行人 三崎 徳
発行 李白社
発売 ビジネス社 〒一〇五―〇〇一四 東京都港区芝三―四―十一 芝シティビル 電話〇三(五四四四)四七六四
定価600円 本体571

JA共済

ウォーミングアップはお早めに。
第二の人生に備えて…。

豊かなセカンドライフのためには、ひとり一人の準備が必要です。それは、若い間にしかできないこと。老後のこと、考えてみませんか。

最大限に力を発揮するために重要なこと、それは入念な準備。スポーツに限った話ではなく、勉強や仕事などいろんなことにあてはまります。もちろん、人生についても同じ。ゆとりあるセカンドライフのために、ひとり一人の備えがますます必要な時代になってきました。確かな老後対策のひとつとして、真剣に考えてみてはいかがでしょうか。JAなら、様々なタイプの個人年金プランをご用意しております。

終身年金タイプ	生涯にわたって年金が受け取れます。年金開始日から15年間は、万一お亡くなりになっても、残りの期間の年金が受け取れます。
定期年金タイプ	5年・10年・15年など、老後の一定期間に受け取れます。公的年金開始までのつなぎとして、ご利用をおすすめします。
掛金建てタイプ	1万円、2万円など、月々の掛金金額から年金金額を決められます。

JAの年金共済

どなたでもご加入になれます(ただし、一定の制限があります)。くわしくは、お近くのJA(農協)へ。 ■ホームページアドレス http://www.ja-kyosai.or.jp

JA共済 しあわせ夢くらぶ HAPPY & DREAM CLUB

くらしの保障をまとめると、おトクとお楽しみがついてくる♪ プラス割引で『ひと・いえ・くるま』の掛金割引、さらにおトクな特典いっぱい。『JA共済しあわせ夢くらぶ』新登場! 手続きは簡単。入会費・年会費は無料です。くわしくは、お近くのJA(農協)へ。

独占スクープ！

アメリカFDAが承認した!?最新漢方がん治療薬 CHML（細胞向性非均質分子脂質）はがんの救世主になれるのか？

リポート&写真／はみだしドクター牧瀬恒平

ドクター・シューからEメールが届いたのが今年の9月26日でした。「ここ1週間ほど広州にいるので、CHMLを使っている病院を貴殿に紹介するから中国に見に来ないか」というメールです。あまりに突然の話で、ぼくは日程をどう調整すればいいか戸惑いました。しかし、「わかった。必ず数日中にそちらに行くから」という返事を、その場で送り返しました。がん治療薬の真偽を確かめる千載一遇のチャンスです。

漢方の要素が入っているのにアメリカ製とはいかに？

CHMLとは《Cytotropic Heterogeneous Molecular Lipids》の略です。日本語に訳せば、細胞向性（あるいは細胞親和性）非均質分子脂質とでもなるでしょうか。がんの特効薬です。こうあっさりと書くと、読者諸氏から「何？　冗談でしょう」という嘲笑が聞こえそうです。おまけに中国ともなると、あの死人まで出したやせ薬の件もあり、「いかがわしい！」と、おしかりを受けるかもしれません。でも、どうやら本当らしいのです。いや、かぎりなく本当に近いらしいと言ったほうが正確でしょうか。

そのCHMLの開発者、中国人の医師、許正（シュー・ゼーンと発音するらしいのですが、ここからはドクター・シューと書きます）との出会いは、中国でも日本でもなく、実はメキシコなのです。ぼくは今年の7月、8月とメキシコの、アメリカとの国境そいの町ティファーナにあるオアシス病院というところに、そこで行われているオゾン療法の研究のために滞在していました。そういうがんの代替療法をやっている病院にドクター・シューがやってきたのです。4、5年前から、その病院と関係があるらしく、CHMLをオゾン療法と併用すればどういう結果になるかということで、付き合いがあったらしいのです。彼はCHMLの説明のためにいつもそのCD-ROMを持ち歩いているらしく、ラップトップのコンピュータを使いながらぼくに熱っぽく語ったのです。まったく、文字どおり熱っぽい語り方で、まるで京劇の役者のように大きな身振り手振りをまじえながら、中国語的英語でまくしたてるのです。言いたい事が、英語でうまく表現できないらしく、ときどき勢いあまって、**つばき**まで飛んできます。自分が開発した薬に絶対の自信がある研究者の語り口です。これはひょっとすると本物ではないかという予感がするのです。嘘やいい加減なものではあり得ません。Memorial Sloan-Kettering Cancer Center、およびNational Cancer InstituteでフェーズⅠとフェーズⅡの治験をクリアしています。

彼は上海出身で、そこの大学の医学部を卒業しています。今年51歳、医学研究者としては最もあぶらの乗りきっている年齢です。10年ほど前にアメリカにやってきて、いまはワシントンに住んでいます。今年12月にはアメリカ国籍が得られるはずだということです。彼が主張するには、CHMLは中国の製品ではなく、アメリカの製品だということです。彼がそのアイデアを中国で得たのは確かなのですが、開発、研究、完成はアメリカで行われ、いま、自分が勤めているアメリカの会社がその特許を得ていると言うのです。中国製品に対する信用のなさを熟知しているようで、CHMLを中国製だとは言ってくれるな、アメリカ製と言ってくれということなのです。

それではCHMLとは何なのか

ここで簡単にCHMLについて説明しておきます。

成分は80%が不飽和脂肪酸、15%が飽和脂肪酸、4%が脂溶性ビタミン、1%がスクワレンで、完全に自然の物質からつくられています。もっとも、不飽和脂肪酸といってもどんな脂肪酸なのかといったことや、原材料など詳しい内容は、**企業秘密らしく明らかにされていません**。アンプルに入った液体です。

これを例えば肝臓がんのケースでは、肝動脈から毎日2アンプル、25日を1サイクルとして投与します。脳腫瘍、とくにグリオーマ（脳腫瘍の40%ほどで、悪性のものと良性のものがあ

© 牧瀬恒平プロフィール

京都今出川牧瀬診療所院長。早稲田大学政経学部政治学科中退。熊本大学医学部卒業。ワルシャワ・メディカル・アカデミー研究留学（脳生理学）。71か国を渡り歩き、世界中の代替医療を研究。著書に牧瀬忠廣の名前で『医者に殺されないための実践ビタミンサバイバル』（ビジネス社刊）などがある。連絡先はwww.drmakise.com。

ります）の場合では、週に2回、1回に2アンプルを3週、局部注射により投与します。乳がんでは12～24アンプルを週に2回、1回に2アンプルを3週、局部注射により投与します。胃がんには動脈注射により毎日2アンプル、25日を1サイクルとして投与します。肺がんには25日間に、100アンプルを静脈注射によって投与します。転移がない場合、7割のケースで、せいぜい2～3サイクルでがんは消滅してしまいます。まさに、目前でがんが見る見る消えていくのです。しかも、まったく副作用がないのです。まさに驚異的です。

CHMの作用にはどんなものがあるのか

その基本的な作用機序は

(1) 血管新生阻害

(2) アポトーシスの誘導

(3) 免疫の向上

の三つです。

がんも他の細胞と同じく、増殖していくためには栄養が必要です。栄養がが細胞に届かなければ、がん細胞は大きくなれません。がんが厄介なのは無秩序に大きくなり他の器官を圧迫したり、あるいは食物の通過を邪魔したりするからです。たとえ胃の中にがんができても、それが直径1センチほどのかたまりでおさまっていてくれれば、転移しないかぎり、末長く共存できます。食物の通過にほとんど影響がないからです。しかし、大きくなり、通過を妨げるから問題なのです。

がんは栄養を得るために、近くを走っている血管に向かって特別の物質を出して、その血管から分岐をつくりださせ、自分のほうに新しい血管を造成させます。これを血管新生と呼びます。CHMLはそのようにしてできた、腫瘍と普通の血管を結ぶ分岐の血管のみを特異的に破壊していきます。正常な血管は、そういうがんに向かう分岐血管とは構造が違うらしく、CHMLにより破壊されないのです。したがって、がんは栄養を補給されることがなく、死んでいきます。サメの軟骨の血管新生阻害作用も有名ですが、CHMLのほうが強力な印象を受けます。彼が見せてくれたひとつの血管造影写真（食道がん）では、CHML投与後わずか3時間で**ガンを取り巻いている血管が消失している**のです。

二番目のアポトーシスとは、細胞の自殺を意味します。例えば、ヒトの手には胎生初期には鳥のように水掻がついていますが、その細胞の自殺により、指が5本離れて生まれ出てくるわけです。また普通、新しい細胞と入れ替わるときは、古い細胞は自ら穏やかに死んでもらわねば困ります。つまり、アポトーシスは生物の生命維持には必須のものなのです。アポトーシスに対して、ネクローシスという言葉があります。これは壊死と訳されます。細胞が熱や化学物質で無理やり壊されることを意味します。アポトーシスはそうではなく、自然に、自ら細胞が溶解していくわけです。がん細胞がそのように死んでくれれば、非常に助かります。CHMLはこのアポトーシスをコントロールするいくつかの遺伝子に作用して、**がん細胞の自然な自殺**を招きます。

30%も免疫が向上するのは本当だろうか

最後の免疫の強化作用ですが、CHMLによって20～30%ほど免疫の力が増すといわれます。しかしこの表現はじつに曖昧で、ぼくは好きではありません。免疫に関する細胞は現在ではおそらく100以上見つかっているはずです。それらの細胞のうち、どれがどのようにして増え、どのようにして免疫を強化するのか、不明瞭です。この点をドクター・シューにもう少し詳しく説明してもらう必要がありますが、次の機会にまわします（その他、細胞の分子警官と呼ばれるP53という遺伝子の発現を促す作用もあるようです）。

以上の三つ、(1) 血管新生阻害、(2) アポトーシスの誘導、(3) 免疫の向上、を同時に行える物質は初めて見ました。しかも、がん細胞そのものをターゲットにして、じかに送り込むわけですから、その効果は確かでしょう。経口的に摂取するサプリメントよりも当然、治療成績はいいはずです。もっとも、その反面、患者さんが手軽に家庭で行えるというものではありません。最低、血管造影ができるほどの施設がある病院に入院して治療されなければいけません。しかし、生きるか死ぬかの病気ですから、それは当然のことですが。

ぼくは、このCHMLを日本にどのように導入するか、あるいは紹介するかを考えていた最中でした。しかしそれには、まず自分の目でCHMLの効果を確かめなくてはいけません。アメ

はみだしドクターマキセの独り言

現代医学の苛酷さと不毛さにいやけがさして、ここ7～8年ひたすら代替療法の探索に力を注いできました。その結果、たいていの病気は副作用の多い現代の医薬品を使わず、ビタミン、ミネラル、その他のサプリメントではるかにいい治療ができることを確信したのですが、がんだけはむずかしいという印象をぬぐえないでいました。もちろん、厚生労働省のお墨付きの抗がん剤よりも、キノコ、フコイダン、環状重合乳酸（CPL）、ゲルマニウム、サメ軟骨、サメ肝油、プロポリス、エピガロカテキン、セレンなどといったサプリメントで対処したほうが、はるかに延命できるのですが、いったんできてしまったがんを治すことはなかなかむずかしいのです。抗がん剤を使っていたときより「痛みがずっと軽減した」「食欲も増した」「動けるようになった」という、いわゆるクオリティー・オブ・ライフの改善を経験される患者さんはずいぶんいらっしゃいますが、結局は亡くなられます。がんが目の前で、みるみる消えていくというような魔法のサプリメントにはまだ遭遇できないでいました。

世間には、「奇跡の～キノコ！」、「～でがん消失！」、「～でがんからの生還！」といったセンセーショナルな題名の本が氾濫しています。たいてい、著者は明記されておらず、どこそこ大学医学博士監修、あるいはなになに研究所所長監修となっていますが、中には実に怪しげな経歴の博士や研究者もおられます。そして、必ず本の最後のページに、そういった奇跡のサプリメントの入手先が載っており、いかにも売らんかなという商魂のみが目立ち、本来素晴らしいはずのサプリメントがかえって貶（おとし）められています。しかし、このCHMLは、まがいものではなさそうなのです。やっと本物に出会えたという感触があるのです。

○オゾン療法とは

鎖骨下静脈から静脈血を体外に取り出し、人工透析器に似た装置に通しながらオゾンを血液に吹き込み、また体内に戻すという治療法です。かなり、がんに効果があります。おおまかにいえば、30パーセントの患者さんのがんをわずか3週間の入院治療で10～30パーセント縮小させます。そして他の30パーセントの患者さんのがんは縮小はしないものの増殖は止まります。しかし、残りの40パーセントの患者さんのがんには効果がありません。要するに60パーセントのがんには効くということで、これはこれなりに、実に素晴らしい治療法です。もちろん、副作用は何ひとつありません（牧瀬）。

リカに見に行くのはたいへんです。時間もお金もかかります。そんなおり中国から、ドクター・シューのEメールが届いたのです。彼はCHMLの治験を中国の病院にも依頼していたらしく、その結果を検討しに中国に帰っていたのです。

75%に有効。素晴らしすぎて眉に唾をつけて「ほんまかいな?」

ぼくはさっそくインターネットで広州行きのフライトを検索しました。大阪からですと中国南方航空が毎日飛んでいます。JASを使用したかったのですが、羽田からしか就航していません。ぼくは関西に住んでいますから、中国南方航空で行くことにしました。

幸い旅行シーズンは終わっていましたから翌週のすべてのフライトに空席がありました。往復の格安チケットで、関西国際空港の使用税も入れて21日間のオープンで5万270円です。東京・福岡往復よりも安いのです。14時50分発で広州には18時に着きます。4時間弱の飛行時間ですが、広州のほうが1時間遅れの時差のためこうなるのです。

ホテルに着き自分の部屋に荷物を置くとすぐにドクター・シューの部屋に行きました。彼とはメキシコ以来約2か月ぶりです。「How are you?」「I'm fine. Thank you and you?」と、初級英会話のテキストブックの決まり文句のようなのあいさつをすると、中国人の脳外科医はぼくに会うために来ていたのではなく、ドクター・シューからCHMLの説明を聞くために来ていたようです。そこにぼくが闖入したのです。タイミングがちょうどよかったわけで、2人でドクター・シューの話を聞きました。

脳腫瘍に対しても目を見張るものがあります。ガンマー・ナイフよりすごそうです。CHMLは腫瘍が限局しているなら、脳腫瘍のタイプにかかわらず、非常に効果があるのです。ドクター・シューの言葉を借りて言えば、ほぼ100%腫瘍は消えるということです。その理由は、CHMLはとくに血管新生阻害作用が強いからです。がん細胞に栄養を補給している通路を破壊するのですから、当然といえば当然です。したがって、転移が激しく、がんがあちらこちらに散在しているような場合は、効果は薄くなります。基本的なイメージとしては、がん細胞に向かって狙い射ちをするような仕方で、CHMLは投与されなければいけないということです。

それでは、初めから狙い射ちなどできない、がん細胞が血液にのって全身を循環している白血病にはどうかというと、彼の資料によると75%に有効なのです。しかも、まったく副作用なしです。実に素晴らしい治療です。あんまり素晴らしすぎて眉に唾をつけて、**「ほんまかいな?」**と、思わず疑いたくなりますが。

中国の最高の病院で治験された結果

翌日、佛山市第一人民医院の院長ドクター・タン（譚）が、病院の自動車でホテルまでぼくとドクター・シューを迎えに来てくれました。佛山市は広州の隣に位置し、車で約40分です。佛山はホウシャンと発音します。広州は人口600万のたいへんな都会です。しかし隣となると田舎ではなかろうかと思っていたのですが、とんでもない間違いでした。非常に整然とした町並みで、日本でいえば、筑波学園都市のような雰囲気を漂わせています。広州にしろ佛山にしろ、このあたりの開発ぶりは尋常ならざるものがあります。

佛山市第一人民医院は創立1881年と歴史は古いのですが、3年前に新しく病院が建設され、いまは超近代的病院に変貌しています。医師の数400、18階立て、ベッド数1500、CTスキャン2台、もちろん事務処理にはコンピュータが導入されています。おそらく日本でもこれだけの規模の病院はないでしょう。中国語では病院のことを医院というらしく、「佛山市第一人民医院」は中国語の表記そのものです。開発途上国の遅れた不潔なイメージは完全に時代遅れです。日本の何とか国立大学医学部付属病院や、どこそこ日赤病院よりはるかに近代的で衛生的です。その大病院の院長であるドクター・タンは、弱冠49歳の俊英の外科医です。若いころの毛沢東にちょっと似た、なかなかハンサムな男です。10月1日より国慶節が始まり、この1週間は休みだというのにドクター・タンはわざわざ休暇を返上して、ぼくが来るのを待っていてくれたのです。まことにありがたいことです。

佛山市第一人民医院の診察室（上）と病室（下）。明るく清潔そうでした。

患者2名と面談すると元気そうな姿が

広い院長室に入ると5分もしないうちに2人の患者さんが入ってきました。2人はCHMLによりがんが完治した人たちです。CTスキャンの写真もそろえてありました。その例をここに簡単に紹介します。

▼患者さんM。女性。1952年2月生まれ。職業。オフィスワーカーで事務。▼1998年5月：右乳房の乳管がんの診断。化学療法を開始する。▼6月：タモキシフェンも使用し始める。▼12月：白血球減少のため化学療法10サイクルで終わる。▼2001年5月：肝臓と腹膜に広範な転移が発見される。▼5月25日よりCHML療法を1サイクル…25

▷中国は意外と便利

時差がたったの1時間、飛行時間が4時間という海外旅行は実に楽です。とくにアメリカへの旅行は時差が14時間～16時間、しかも10時間以上のフライトですから、すっかり体の調子が狂ってしまいます。このことは、もし日本人の患者さんが中国の病院でCHMLの治療を受けるようなことがある場合、実に便利なことなのです。とくにアメリカに、高度な手術を受けに行く患者さんがいますが、行くだけで体力を消耗し、かえって体に悪いのではないかと心配されることがあります。健康な人間でもかなり疲れますから。しかし、4時間であれば、これは何とかしのげます。ビジネスクラスに乗せてあげればもっと楽です（牧瀬）。

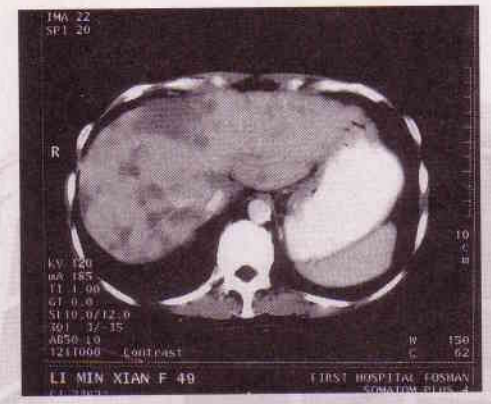
日行う。▼1か月あいだを置き、さらに1サイクル、25日、CHML療法を行う。▼すべてのがんが完全に消失し、5日間自宅休養したあと、職場に復帰。

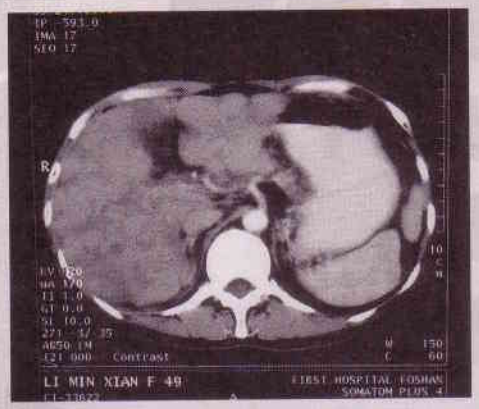
▼患者さんR。男性。1957年2月生まれ。職業、企業の社長。▼1978年：B型肝炎と診断される。▼2000年12月14日：肝臓がんと診断される。肝臓の左葉、右葉が広範にがんで占められる。▼12月20日：CHML治療を1サイクル…25日行う。▼がんが縮小したことを確認して、▼2001年2月24日にがん摘出手術を行う。▼2001年3月29日よりCHML治療を1サイクル行う。▼ガンは完全に消失し、肝硬変もなく、現在に至る。

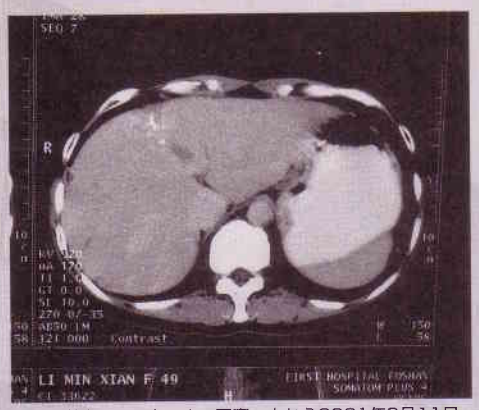
700万円の治療費は高い？「病気の沙汰も金次第」

両者とも現代医学では、ただ座して死を待つのみという状態からの治癒です。素晴らしい奇跡のような治療です。

そこで問題になるのが、CHMLの料金です。これが残念ながら、目茶苦茶に高いのです。CHML1アンプルが500ドルするというのです。500ドルとは、1ドル120円で計算すると6万円です。たとえば肝臓がんでは、1サイクルが25日、毎日2アンプル必要です。すると6万円×2×25＝300万円です。2サイクルですと、その2倍の600万円。平均2サイクルでがんが消失するといわれますから、600万円のCHML代と、50日の入院費が必要です。1日の入院費が1万5000円として計算すると、75万円。600万円+75万円で、けっきょく700万円近くかかってしまいます。もちろん日本の健康保険は適用されません。すべて自費です。しかし、ものは考えようで700万円で命が助かれば、それは**実に安いものだ**とも言えるわけです。が、それにしてもたいへんな高額です。何とかならないものかと思うのですが、何ともならないようです。日本人にとっても膨大な金額ですからいまだに平均月給が8000円の広州周辺においては、きわめて例外的な人たちか、あるいは治験に参加した人たちしか受けられていないようです。







ある患者さんのスキャナー写真。上から2001年8月11日、同12月12日、2002年7月3日の順。黒いカゲが減少しているのがわかるはず（注：撮影した部位が多少ズレているのはお許しください。素人写真なので）。

元患者さんの食べっぷりに感嘆！

患者さん2人にインタビューさせてもらったあと、ドクター・タン、ドクター・シューそれにぼくは、男性患者さんRに、近くの高級レストランに招待されました。広東ダックが出ました。生ネギと組み合せた絶妙な味です。カリカリとした皮、軽い脂肪の柔らかさ、ネギの刺激的な爽やかさ。一瞬、言葉をなくし、ひたすらダックに箸がのびます。中国料理の広大深遠な歴史にはフランス料理もイタリア料理もロシア料理も勝てません。ましてや、アメリカのマクドナルドのハンバーガーなど、あれは人類に対する冒涜であるとさえ思われてきます。中国とはとんでもない国なのです。さすが、東アジアの大文明です。人口にして日本の10倍。歴史の長さにして日本の2倍。単純計算では医学においても20倍の人手がかかっているわけです。おまけに日本の数十倍の国土を有しています。あらゆる原料を調達できます。こういう国が近代化されると、いい薬ができないわけはないのです。どうやらCHMLは本物のようです。

R氏はぼくの内なる感動など知るよしもなく、血色良好、食欲旺盛、出された料理を美味しそうに食べていました。かつて死の一歩手前まで行ったとはとても信じられません。ドクター・タンに、佛山市第一人民医院は日本からもがん患者を受け入れてくれるだろうかとたずねると、すかさずもちろんという返事が返ってきました。しかし、当面は肝臓がんの患者を受け入れたいとのことです。それは、他のがんからの転移にしろ、B型、C型肝炎からの原発性でも、とくに肝臓がんに好成績をあげており、外国からの患者さんを治癒させることは国家的威信がかかっているようだからです。

国家的威信。日本ではとっくの昔、大日本帝国の時代に使われていた懐かしい言葉。医者も看護婦も厚労省大臣もみ～んな忘れてしまった郷愁に満ちた単語。しかし、ひょとすると、なりふりかまわず利益の追求のみに走る日本の医療にとって、最も必要な気概。どういうわけか思わず、CHMLに栄光あれ、と喝采をおくりたくなってしまいました。

次号以下、ドクターマキセのリポートは続きます。

◎患者よ、がんと闘おう

「患者よ、がんと闘うな」という本があります。慶應病院放射線科の、かの有名な近藤誠先生が書かれています。「抗がん剤の副作用がわかる本」など、多数の著書で、日本で行われているでたらめながん治療を徹底的に検証し、その欺瞞性を鋭く指摘されておられます。ぼくは非常に尊敬していますが、ただ残念なことに、がんになってしを厳密に証明されていない非証明治療だと片付けられてしまうので、ワラをもすがりたい患者さんや患者さんの家族としては、もうひとつ深くつっこんでほしいという気持ちが残ります。もっとも、立場上、厚生労働省が認可していない治療を行うことができないということは理解されるのですが。しかし、このCHMLがあれば、「患者よ、がんと闘おう」と訴えたくなります（竹瀬）。